
不惑

3kaidou

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

不惑

【Nコード】

N9997U

【作者名】

3kaidou

【あらすじ】

四十歳独身女の、哀れかつ笑える日常。と、非日常。

序

「奥さん」

給湯室から戻った私に、斜め前の席に座っている上司が、控えめに声をかけてきた。

「はい、なんでしょうか」

どんなときでも私は笑顔だ。たとえ相手が煙草臭を撒き散らす禿げのオッサンだとしても。

「ちよつと言いつらいんだけど……」

だったら言わないでよね、と切り返したくなるが、一回頷いて話を促した。本当に言いつらそうに上司は眉を八の字にし、喉仏を上させた。

「君のストッキング、いつも穴があいてるんだけど……分ってるよね？」

「はい」

だから何？

「かなり大きい穴だし、目立つと思うんだよ。ここの部署は来客応対もあることだし」

「すみません。脱いできます」

席を立てトイレに向かおうとすると、上司が鋭い声で私の名を読んだ。

いやだわこの苗字。独身なのに「奥さん」って呼ばれるの。大声で呼ばれるとメロドラマになってしまう。

声を荒げた自分を恥じるように、上司が咳払いを一つした。

「替えのストッキングは」

「ありません、ナマアシで良いですよね？」

「それは困るよ。うちの会社は」

「ストッキング着用って決まりですよね？ 会社の。だからはいてるんです。ナマアシよりはマシですよね？」

笑顔は保ちつつ、声はあえて大きめにする。ここで弱気になったら新しいストッキングを買わなくてはならなくなる。ストッキングを一本五十円で売っている店も探せばあるだろう。だけど、その五十円でパンの耳一束が買えてしまうのだ。まさに、その五十円が命取り。

第一、ストッキング着用を会社が義務付けているのだから、会社がストッキングを支給すべきだ。それが嫌なら私服を許可すべきだ。私は毎日ジーパンをはきたい。いまだき制服のある会社なんて古くて封建的だ。銀行や大手会社ならまだ分るけど、こんな社員数三十人にも満たない会社で制服なんて——頭の中は論理的思考が渦巻いているけれど、そんなこと億尾にも出さない。知性のある女は嫌われる。

「ナマアシも穴あきストッキングも困るんだよ。たまにストッキングが伝線してる子をみかけるけど、すぐに自分で気がついて新しいのに取り替えてるよ。それぐらい普通にさ……」

周りに人がいないせいか、上司の態度が横柄になってくる。これだからオッサンは嫌だ。体裁を気にする男尊女卑野郎ばかり。

「お言葉ですが……私のストッキングは誰にも迷惑をかけていませんよね？ 来客対応は麻美ちゃんの役目で、私は滅多にお客様にお会いしないし。……ご自分の煙草の臭いのほうが余程迷惑だと思いますよ」

丁寧な口調は崩さない。その方が相手に屈辱感を与えるから。

上司の顔は案外冷静さを保っていたものの、チュエツと、口から摩訶不思議な音を出した。

「は……話をすり替えるな。お前のストッキングは穴というより破れてるんだよ。レイプにあったような格好をするな」

途中で声が掠れた。

興奮と、日頃の煙草のせいだろう。目元もほんのり赤くなっている。

「すみません。気をつけたいのですが、ストッキングを買うお金が

ないんです。それにレイプ云々は立派なセクハラ発言になると思います」

私は脅しをかけた。

「この件、社長に相談させていただきますね」

「そんな……大事にするほどの話じゃないだろ？ ……わかったよ、ストッキングは私のポケットマネーで……」

もごもご言っていてよく聞き取れないが、相手が折れてくれたようだ。それもストッキングのプレゼント付き。言ってみるものだ……そうほくそ笑んだとき、ドアの開く音がした。

「あ、奥さん、電話当番お疲れ様です」

昼食から麻美ちゃんが戻ってきた。甲高い声がワンフロアの職場に響き渡る。その声を合図に昼食早番組が、冷たくも暖かくもない風と一緒に、部屋に流れ込んでくる。

私より皆若い連中。二十代前半から三十代半ばの人たちばかりで、四十の私は、少し浮いてしまっている気がする。

麻美ちゃん以外の同僚は私たちに目もくれず、足早に各々の席へと散らばっていく。

「話の続きは、ランチでいかがですか？」

もちろん、上司の奢りを期待して、だけど。

上司は一瞬嫌そうに眉間に皺を寄せたが、渋々というように小さく頷いた。

※

天麴羅のような贅沢な昼食は、ここ一年まったく食べていなかった。良質な油を使っているのか、メインの海老を包む衣は、クリーミーで香ばしい。そんなわけで、海老の天麴羅を勿体ぶって噛んでいると、上司が話を切り出してくる。

「なんでストッキングを買うお金がないんだ？ うちの会社は、まあ薄給の部類に入るんだろうけど、日用品が買えないほど少なくとも

ないだろ？」

声には困惑の色が混じっている。相当不可解なのだろう、私の主張が。

驚きの早さで、天麩羅と蕎麦の豪華ランチセットを平らげた上司が、爪楊枝で食べかすをほじりはじめる。その躍り出たカスが勢いあまってこちらに飛んでこないかひやひやしながら、「貯金が全然ないんです。婚約していた人に騙されて」とシンプルに答えた。

これは本当の話。いわゆる結婚詐欺師にまんまと私は騙された。

摩った金の総額は、およそ八百万。婚約者が失踪したと知ったときは、騙されたとは微塵も思わず、彼を心配していろんな所を探し回った。彼の故郷である函館や、元勤務先の横浜。妹が一人暮らしをしている千葉は津田沼。彼の名前を電話帳で探してもなかったから、彼が話していたことをヒントに場所のめどをつけ聞き込みをした。当然ながら素人では見つけることが難しく、何の収穫もなく東京に戻ったけど。心配で不安で、三十年来の女友達に相談したら、いとも簡単にこう言った。「結婚詐欺ね、それは」。

「それは……とんだ目にあったね」

控え目な上司の声で、回想から現実へと私は戻った。

手元の皿にはまだ天麩羅が残っている。インゲンと大葉。後者を選ぶ。三十歳を過ぎた頃から、アクのある食材が好きになった。子供が嫌がる食べ物って、大人になれば大概大丈夫になる。

「でもね」

咳払いをし、上司は続ける。

「ストッキングの穴は、やっぱり社会人としてどうかと思うんだ」
「最初から破れているわけじゃないんです。今朝はいたときは小さい穴だったんです。動くうちに、こう、穴が広がっちゃうっていうか……三階堂部長は男の人だから分らないと思うけど、ストッキングって結構高い消耗品なんですよ」

「君って、ああいえばこういう……だね」

上司の呆れ顔は、なぜか冷たい印象を与えない。寧ろ相手に安心

感を与えるような表情だ。

残ったインゲンを箸で摘み、口に入れようとして気が変わり、天麩羅を上司の空っぽの皿にそっと置く。

「あげます」

上司はぽかんとしたが、「ああ……ありがとう」と言ってインゲンを箸で摘んだ。好物だったらしい。口元に笑みが浮かんでいる。そろそろ本題に進む頃だ。

「三階堂部長、先ほどのセクハラ発言ですけど……」

面白いほど部長の顔が強張る。もっと怯えた顔が見たいと思ったけど、時間がなかった。昼休みはあと十五分で終わってしまう。

「部長、欲求不満なんですか？」

「な……」

さすがに面食らったようで、言葉が出てこないようだ。

「私もなんです。女の四十って性欲のピークみたいで」

上目遣いに上司の顔を見て、一度ゆっくり瞬きした。私は知っている。この目が結構男に有効だということを。

私は穴あきストッキングを平気ではなく女だけど、ルックス自体は悪くない。四十のわりに、身長百六十三センチ四十八キロをキープしているし、ここ一年は徒歩で通勤しているため、上半身下半身ともそれなりに筋肉が付いている。顔も卵型で整っている方だ。中学位までは奥二重の瞼にコンプレックスを抱いていたけれど、高校に入って、少しアイラインを入れるだけでパッチリして見えることを発見した。二十代までは男に不自由したことは一度もない。……恋愛経験は豊富なはずなのに、どうして私は結婚詐欺に遭ってしまったんだろう、謎だ。

とにかく、恋愛は当分したくない。でも、三大欲求はきちんと満たしたいわけで……

「仕事のあと、お時間空いてますか？ 今日とか」

上司の持っている箸からインゲンの天麩羅が落ち、つけ汁がぽちゅんと跳ねた。

序（後書き）

このあとエロスが多少出てくる……かも。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9997u/>

不惑

2011年7月19日03時21分発行